

<前回・バルト2・『教会教義学』を中心に>

1930代以降：ナチス・ドイツ的キリスト者に対する教会闘争を指導・バルメン宣言

- ・弁証法神学を超えて、『教会教義学』(KD、「神の言の神学」)へ
- ・教会闘争、自然神学論争(ブルンナー)

自由主義神学と弁証法神学との対立から、本来の神学的思惟へ
神を投影する人間の想像力の汚染を脱却した神学構築の試み

(1)『教会教義学』の方法と体系

1. アンセルムスの発見。『知解を求める信仰』

← アンセルムス『プロスロギオン』、存在論的神の存在論証

← アウグスティヌス「理解するために信ぜよ(信じる)」(Credo ut intelligam)

神観念(「これ以上大きなものが考えられない或る者」)から神の現実存在へ
心の内と外?、大きさ?

2. 知解を求める信仰：信仰固有の、信仰自体が可能性として内包するラチオ(神学固有の学問性)の展開としての神学。

神・啓示から。楢岡(シュライアマハー)に対する円=キリスト論集中。

「信仰と理性」に対して「信仰から理性」

神の啓示と信仰が接続するのが、「キリストの出来事」であり、その認識根拠は聖書的テキスト。

3. 宗教と啓示との峻別：フォイエルバッハ問題への解答の一環

宗教：神・救済へ向かおうとする人間的努力=自己救済の試み、
不信仰としての宗教

4. 神の言葉の神学としての教会教義学

神の言葉(啓示)の三一性：神の第二位格=キリスト/イエス、聖書、説教

↓

神学体系の基本構造としての三一性

5. 福嶋揚『カール・バルト 破局のなかの希望』ぷねうま舎、2015年。

(2)『教会教義学』再考

6. バルトと自然神学

バルトとブルンナーにおける自然神学論争(1934年)とは何だったのか。

純粹的な神学の方法論的議論だったのか。

7. 自然神学論争のコンテクストとしての教会闘争

A・マクグラス『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の展開』教文館、
2011年(原著、2008年)。

「バルト—ブルンナー論争が生じた一九三四年は、アドルフ・ヒトラー」がドイツで独裁政権を掌握した年でもある。ブルンナーが自然に訴えたことの根底には、ルターにまで遡ることのできる、「創造の秩序」として知られる考え方がある、「バルトの関心の一部を占めていたのは、国家を神にとってのモデルとするための神学的基盤を、ブルンナーがおそらく無意識のうちに築いてしまった、ということであった。」(218)

波多野精一『宗教哲学序論』「第二章—バルトとブルンナー」(1940年)

(『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、2012年、67-83頁)

8. バルトから何を受け継ぐか。

キリスト教神学とは如何なる学問か。

神と学とのキリスト教（生→人間）における緊張

9. トランスのバルト論：バルト神学において自然神学は場を持つ。

トーマス・F・トランス『科学としての神学の基礎』教文館、1990年（原著、1980年）。
「バルトが伝統的自然神学に対して反対しているのは」「その合理的構造ではなく、それの持つ「独立的」という性格、すなわち自然神学が生ける三一の神の能動的な自己開示から抽象化し、「自然のみ」に基づいて展開する自律的な合理的構造なのである」、「自然神学は正しく理解された場合には啓示神学の「内に」含まれる、とバルトは主張する」（121）
「自然幾何学が動的で実在論的な物理学のなかに組み込まれている時空構造であるのと同様に、自然神学は動的で実在論的な神学のなかに組み込まれている時空構造なのである。」（124）

「神学的科学と自然科学との間には、本来の意味での「自然な」連関が存在する」（125）
「アンセルムス」「知解可能性と存在と統一は、あらゆる被造的実在を特徴づけるものである」（132）、「存在論的論証は被造的世界と知解可能性からではなく、神の至高の存在と、自己同一的知解可能性がアンセルムスに押し迫ってきたのであった」、「自然神学といわゆる啓示神学との内的連関」「祈りの文脈」（133）

10. まとめ

(1) フォイエルバッハ宗教批判（近代的思惟）へのキリスト教神学の応答の一つの典型。

(2) 近代のキリスト教とその神学の問題性を鋭く捉え、キリスト教と神学の固有性を再確認した。神学にはその固有の論理と方法がある。

(3) フォイエルバッハの宗教批判に十分に答えたことになるのか。

フォイエルバッハ問題は終わらない。

(4) 宗教は不信仰な人間的努力という評価は、キリスト教の自己批判としてはわかるとしても、他の諸宗教を一方向的にいっしょくたんに扱うのは正当なやり方と言えるか。バルトの立場からは、他の宗教との対話などあり得ない？！。

(5) ドイツ教会闘争における批判力。

戦後におけるバルトの権威化 → バルト主義の弊害

バルトとバルト主義との相違

(6) 自由主義神学の過度の否定。

神学思想、とくに歴史的研究への否定的影響。聖書学と神学との亀裂は深まった。

↓

近代とキリスト教との区別の確認、その上で、近代との関わりを再構築すること。

5. ブルトマン 1 —— 新約聖書学

「ブルトマン(Rudolf Bultmann, 1884-1976)」(大貫隆)

ドイツのプロテスタント神学者、新約聖書学を中心に『共観福音書伝承史』(1921)、『イエス』(26)、『信仰と理性』(33-65)、『ヨハネの福音書』(41)、『新約聖書と神話』(41)、『新約聖書神学』(48-53)などの代表作。

19世紀までのイエス伝研究の史実主義の限界を明らかにした上で、生前のイエスが述べ伝えた使信(ケリュグマ)と原始教会がイエスについて述べ伝えた使信に共通して含まれる実存理解を取り出し、それとの出会いと決断を促す「使信の神学」を唱道。古代の神話的な表現で書かれている聖書本文の背後にある実存理解に迫るための積極的な方法としての「非神話化」。『ヨハネの福音書』と『新約聖書神学』はその実践。

(1) 近代聖書学と自由主義神学

1. 近代的知のモデルとしての自然主義と歴史主義

啓蒙主義的合理主義：実証主義的自然科学と近代歴史学

神学も聖書研究も、この変動を免れてはいない。＝近代聖書学

超自然・奇跡の排除あるいは合理化

2. 近代聖書学の諸原理

・パネンベルク

「トレルチによれば歴史的批判は、「すべての歴史的出来事の原理的同質性」を含む「類比の適用」に基づき、また、歴史的には普遍的な相関関係、「精神的・歴史的生のあらゆる現象の相互作用」があるという前提に基づいている。」(54)、「原理的同質性」、「あらゆる出来事は同質性を持つはずであるという要請」、「類比の持っている認識の力は、まさしく類比が非同質的なもののなかに同質的なものを見ることを教えるという点に基づく」(59)。

↓

方法論的現在中心主義＝歴史的思惟の解釈学的構造

制度的再帰性における歴史学・歴史研究

3. 歴史的批判的方法：文献学＋歴史学→近代聖書学のパラダイム

伝承史：イエス→断片的な口承伝承（弟子たち）→収集・文書化→編集

・現存のテキストから最古層へ遡及し再構成する。弟子集団＝共同体における伝承の法則性の確定→逆算（様式批判：文学様式と生活の座との対応）

・編集者の意図・神学の解明（編集批判）

(2) ブルトマンの新約聖書学

4. 弁証法神学運動におけるブルトマン

・方法論としての聖書学と自由主義神学の同質性

・弁証法神学への共鳴、キルケゴール的な信仰理解 → 次回「ブルトマン2」

5. 新約聖書学の方法とその帰結

・様式批判

「言葉ないし物語の形での伝承片」「H. Gunkel とその弟子たちによって旧約研究に用いられた様式史的考察をそれらに適用する試み」(9)

「研究が内容批判(Sachkritik)抜きで遂行されえないのと同様に、文学批判(Literarkritik)を抜きにして成立しえないこと」(9)

「伝承と編集の分離」(10)

「個々の伝承の歴史を叙述することを課題とする作業」「それらの伝承片の成立と歴史を再構成することによって、成文化以前の伝承の歴史を解明する」

「ある共同体の生活の凝縮したものとしての文学が、その共同体のきわめて特定の生活の表現および必要の中から生まれたということ」

「一定の文体(Stil)、様式(Form)、および文学類型(Gattung)を生み出した」

「すべての文学類型は固有の<生活の座>(Sitz im Leben)(Gunkel)を持つ」

「生活の座」「個々の歴史的イベントではなく、共同体の生活における典型的な情況ないし行動様式」

「<類型>ないし<様式>」「も美学的概念ではなく社会学的概念なのである」(11)

「様式史研究が他のあらゆる史学的研究と基本的に異ならず、循環論証の一種であることを認識することは、本質的に重要である」(12)

様式と共同体の生活



・方法論的な制約：個人の内面には遡及しない。イエスの宗教意識は？

6. イエスと初期キリスト教

「イエスの告知は新約聖書神学の諸前提に属するのであって、新約聖書学自体の一部ではない。なぜなら、新約聖書の神学は、キリスト教がその対象、根拠、帰結をたしかめていくその思想の展開の中に存するのである。そして、キリスト教信仰というものは、キリスト教のケリュグマ（宣教）、つまりイエス・キリスト、しかも十字架につけられし者、甦えりし者を神の終末論的な救いの業として告知するケリュグマが存在してのちに、初めて存するのである。」(3)

イエス個人

初期キリスト教

イエスの宗教運動（神の国についての告知）→ キリスト教共同体・宣教 → 神学

7. イエスをどう描くか

「イエスという歴史的現象を心理学的に説明しようとは全然考えていない。だから伝記本来の事柄は、短い導入的な一節を除いて、全然立ち入らない。」

「読者を一つの歴史観察に導こうというつもりはない」、「読者が単なる観察に留まってしまいかどうかは、もはや読者の問題なのである。」(5)

「イエスの「人となり」についての興味も排除される」、「イエスが自分をメシアと考えたか否か、・・・私は以下の叙述においてこの問題をまったく顧慮しなかった。それは結局のところ、この問題については確かなことは何も言えないからではなく、むしろこの問題は副次的な事柄だと思うからである。」(7)

「その対象は以上からしてイエスの生涯や人となりではなく、その「教説」、その宣教なのである。私たちはイエスの生涯や人となりについては少ししか知らない代りに、彼の宣教については多くを知っていて、一貫した像を構成することができる」、「史料が私たちに与えるものは、実際さしあたり教団の宣教なのである。」(9)

<参考文献>

1. トレルチ「神学における歴史的方法と教義的方法について」、『トレルチ著作集2』ヨルダン社。
2. パネンベルク「救済の出来事と歴史」、『組織神学の根本問題』日本基督教団出版局。
3. エドガー・V・マックナイト『様式史とは何か』ヨルダン社。
4. ノーマン・ペリン『編集史とは何か』ヨルダン社。
5. 浅野淳博ほか『新約聖書解釈の手引き』日本キリスト教団出版局編。
辻学「第2章 資料・様式・編集」
6. ブルトマン『共観福音書伝承史I II』（『ブルトマン著作集』1、2。新教出版社）、
『新約聖書神学I II III』（『ブルトマン著作集』3、4、5。新教出版社）
『イエス・原始キリスト教』（『ブルトマン著作集』6。新教出版社）
『イエス』（1926）、「原始キリスト教——古代諸宗教の枠の中で」（1949）
7. John Painter, *Theology as Hermeneutics. Rudolf Bultmann's Interpretation of the History of Jesus*, The Almond Press, 1987.